

2020年度日本国際看護学会第4回研究委員会分科会活動報告書

第4回研究分科会は、新型コロナウイルス感染症のため、4分科会ともにオンライン開催とした。
分科会開催の日時順に、活動を報告する。

I. 中国・四国・九州・沖縄ブロック

ブロック名	中国・四国・九州・沖縄ブロック	報告委員名	桑野紀子	
実施日時	2021年2月19日（金）17:00～19:00		実施場所	Zoom 開催
分科会テーマ	「実践に活かす研究活動 ～地域で行う分野横断の研究活動～」		講師名・ 所属	川崎涼子 長崎大学生命医科学域保健学系
参加者	計12名（講師含む。参加者2名は非学会員）			
活動内容概要：				
1. 講演内容				
1) 国内での研究活動について				
<p>自殺予防ゲートキーパーに関する研究として、「スナックのママは自殺予防ゲートキーパーになり得るか？」について紹介された。Project cycle management (PCM) の手法を使って1年程勉強会を行う中で着想に至った研究であった。現場で活動する専門職者との普段からの関係づくり（勉強会等）が重要であること、協働の中から着想を得ることの有用性、現場に研究成果を活かすことの重要性などについてお話があった。上記研究では、研究結果を元に、自殺予防ゲートキーパー講習会が開催され、現在もその講習会を受講したスナックのママさんたちが活動しているとのことであった。</p> <p>また、「刑事施設から社会復帰をする者のうち、健康課題を抱える者を地域でどのように支援するか？」という研究の紹介があった。本研究においては、多職種連携コンピテンシが必要であること、また、コラボレーションする際には、チームメンバーの所属組織や、メンバーの専門職性（主要な成果基準等）を知ることが大切とのことであった。</p>				
2) 海外での研究について				
<p>「ブラジルアマゾナス州コミュニティヘルスワーカーの活動に関する住民の認識と満足度」という研究の紹介があった。講師は主にデータ分析に関わり、PCMのフレームワークで分析し、論文にまとめたということだった。論文の著者として現地の関係者に入ってもらうことで、現場に役立ててもらうことも期待しやすくなる。また、現地で収集したデータを論文化するには関係諸氏の協力や、諸手続きが必要であることも述べられた。</p> <p>“How to approach an inter-disciplinary thesis – The Thesis Whisperer” のHPの内容紹介があった。</p>				
3) Q&A、ディスカッション				
<p>ご質問や感想を述べていただく際に、ご所属とお名前を言っていただき、簡単な自己紹介もお願いした。参加者同士の交流の場にもなった。最後までご参加いただいた全員が質問したり、感想を述べたりしていた。</p>				
2. 参加者の感想、質問				
<ul style="list-style-type: none"> ・地域での研究の内容がきけて、非常に勉強になった。今後の研究に活かしたい。 ・着想に至った詳しい経緯、研究に関わることになった経緯について（質問） 				

・海外のフィールドをどのように決めていったか（質問）等の感想や質問があった。

3. 今回の開催について（担当委員より）

初めてのZoom開催であったが、遠隔地の会員や非会員も参加しやすく、メリットが大きかった。講演内容は、研究の実際に関する具体的内容が多く含まれていた。研究の着想に至った経緯、多職種間で共同研究を行う際の心構えやメリット、注意すべき点等、今後の研究活動に活かせる内容であった。参加者からの感想は概ね好評であった。オンラインで分科会を開催することで、全国の学会員により多くの機会を提供できる可能性があるため、今後の開催方法についても検討していきたい。

II. 近畿北陸東海ブロック

ブロック名	近畿北陸東海ブロック	報告委員名	マルティネス真喜子	
実施日時	2020年2月15日（土）10:00～12:00		実施場所	Zoom
分科会テーマ	国際看護学研究 -データの分析方法 ベトナム高齢者の観察研究の事例-	講師名・ 所属	LE NGUYEN KIM NGAN 先生 藤田医科大学	
参加者	計10名（講師含む）			

活動内容概要：

1. 講義内容

1) 研究背景

日本社会における高齢化の進行にともない、在宅で暮らす高齢者が増加している。ベトナムにおいても高齢化が進んでいるため、両国の在宅高齢者に関する比較研究を行うこととなった。

2) 調査1：心疾患を患う高齢者の実態

市街地（ハノイ）に住む、60歳以上の女性37名、男性14名に対し、質問紙及び面接調査（家族を含む）を実施。

ADL、IADLの評価も行ったが、参加者はほぼ自立。少ない年金や補助金（戦争への貢献による）での老後の経済状況を子どもが支援し、家族のサポートを得られていることがわかった。子どもたちが近くに住み、毎日会える「家族の交流」や近所の人々、友人との交流といった「社会交流」があった。

調査2：認知症高齢者の実態

中央老人病院に通院中の認知症高齢者の自宅での参与観察・面接調査。

ベトナムにおいては認知症高齢者に対する治療は少なく、受け入れ病院もほぼない。

事例1) 女性認知症高齢者・夫も精神的に問題のあるケース

別居の娘2人が毎日交代で世話し、経済的援助も行う。認知症のため、外出してしまわないよう、家の門に鍵をかける。⇒地域交流が断たれる。娘の発言「母への援助は負担ではない。母がかわいそう。子どもたち（孫）にも覚えてもらいたい」

◎家族の発言や行動をデータとして質的研究を行う。

→ケアギバーのあり方や、支援のあり方を見出す。

事例2) 大家族における認知症高齢者のケース

79歳の女性、歩行不可。5階建ての家に家族と住む。

家族は総勢47名にもなる。家族関係は良好。家計に誇りを持つ。

家族の発言「援助を負担するのは大丈夫」面倒見がよく、触れて関わっている。

事例3) ADLが高めの高齢者のケース

72歳の男性。生活上、自身でできることも多く、自宅にて生活可能。

3) 調査・研究のポイント

①高齢者にとって、環境は重要。援助者も環境の一部である。

②参加観察の大切さ。

- ・対象者の生活様式
- ・人間社会の普遍性
- ・人間社会の多様性（個別性）
- ・理論の多元化

2. 参加者の質問・感想

Q1: ベトナムと日本との比較で見えた、強みとは？

A1: ベトナムでは高齢者に対する制度がほとんどない。認知症に対応した制度などはこれから。一方、日本は制度が進んでいる。高齢者を支えられる制度がある。ベトナムでは、家族が高齢者を支えている。高齢者本人がかわいそうだと感じており、何かいい制度があれば教えてほしいという家族の要望が存在する。

Q2: 多民族国家という点での違いは何かあるのか？

A2: 地域での文化の差が大きい。未開のものが多い。それらも受け入れて対応する必要がある。今回は、キン族の調査がメインだったが、他の民族についても調査できることが望ましい。また、「認知症」という言葉や認識も違う。民族によっても違うのではないかと推察される。

Q3: ベトナムに介護職は存在するのか？

A3: 看護補助が介護職という位置づけ。特に資格はない

Q4: 調査研究にあたって、倫理的配慮といった視点で困ったことなどはなかったか？

A4: ベトナムの調査では、研究者の母国でもあり、現地の状況も理解しており、言語的に問題もなかったため、受け入れもよく、問題はなかった。病院からすぐに対象者を選定してもらえるような状況であった。

3. 今回の開催について（担当委員より）

今年度はオンライン開催となり、地域に関わらず参加を募ることができた。講演の内容はベトナムの写真など多く取り入れられ、現地の高齢者の状況が伝わってくるものであった。日本における高齢者福祉の課題は山積しているが、ベトナムのように家族や地域があたたかく支援している地域社会の在り方を参考にしていかなければならないと感じ、日本社会にのみ目を向けるのではなく、広く海外の社会の在り方にも目を向ける必要性を改めて感じた。同時に国際看護の意義、看護職の俯瞰的な視野の重要性を痛感した。講演後、参加者からの質問も複数あり、有意義な分科会となった。

今後は、オンライン開催の利点を生かし、より多くの方々に参加していただけるようにしたい。また、会員以外の方々にも参加していただけるような広報等の工夫も必要であると感じる。参加者同士でも意見交換ができるような会の構成や運営ができるとよいのではないかと考える。

Ⅲ. 北海道・東北ブロック

ブロック名	北海道・東北ブロック	報告委員名	松永早苗
実施日時	2021年2月27日（土）10:00～12:00	実施場所	Zoom 開催
分科会テーマ	「国際看護教育について～2年間の授業経験とこれまでの研究から伝えられること～」	講師名・所属	久保宣子先生 八戸学院大学
参加者	計12名（講師含む。）		

活動内容概要：

1. 講演内容

1) 文献レビューから得られた「国際看護」をテーマとした研究

講師が「国際看護」について文献検討した結果を紹介した。「国際看護」をテーマとした研究には、国際看護を担う人のコンピテンシーの研究、国際性を備えた看護職の育成に関する研究、異文化理解に関する研究があった。

2) 「国際看護の教授内容」に関する研究から得た知見

講師が実施した国際看護のプログラムの実態調査の報告がなされた。調査より、国際看護の教授内容は、国際保健活動について、国際活動の経験を伝えるなどが列挙されていた。

講師は、大学1年生を対象に「国際看護の授業で学びたいこと」についてニーズ調査を実施していた。看護学生は、世界の疾病理解、先進国の看護の理解、パンデミックについてなどへの関心が高かった。看護学生は、在日外国人について、国際協力活動への関心は低かった。海外研修においては、医療福祉施設の見学や現地の人々や学生との交流に関心が高かった。講師は、同調査を中国の学生にも実施しており、中国の学生は、日本の学生に比べ国外での活躍を視野に入れて国際協力について関心を高く示していた。

講師は、看護大学を対象に国際看護で教授している内容についても調査している。授業内容としては、世界の健康問題、国際看護に関する組織の紹介、国際社会、経済について教授しているところが多かった。先の調査と比較して、教員が教えたい国際看護の内容と学生が学びたい国際看護の内容とにずれがあった。

3) 講師が実施してきた「国際看護」の授業内容の紹介

講師が取り組んできた「国際看護活動論」の授業内容について紹介された。国家試験問題も参考に、授業内容を組み立てている。授業では、「日本について考える」など学生が主となり考えることができる内容としている。

ハンガーゲームなど実際に実施しているワークの紹介を得た。

4) Q&A、ディスカッション

参加者から講師へ研究の知見、授業内容への質問が活発にだされた。また、参加者が実施している活動や授業内容の紹介などを紹介する機会となり、参加者同士の交流の場となった。最後までご参加いただいた全員が質問したり、感想を述べたりしていた。

2. 参加者の感想、質問

- ・研究から得た知見から授業を組み立てており、非常に参考になった。
- ・研究対象を看護大学1年生としたのはなぜか（質問）など、積極的な質問が多かった。
- ・意見交換では、参加者が実施している授業内容などの紹介を得ることができた。

3. 今回の開催について（担当委員より）

ブロックすべてにおいて Zoom 開催であったため、遠隔地の会員においても参加者の興味ある分科会に参加することができ、メリットが大きかった。講演内容は、講師の研究から得た知見や、実際に行っている授業内容などを紹介していただき、参加者から積極的な意見交換を得ることができた。

今後もオンラインで分科会を開催することで、全国の学会員により多くの機会を提供できる可能性があると考えます。

IV. 関東・甲信越ブロック

ブロック名	関東甲信越ブロック	報告委員	土谷ちひろ
実施日時	2021年2月28日 13:00~15:00	場所	Zoomによるオンライン開催
分科会テーマ	「コロナ禍を通して国際看護の動向と今後の課題に向けて」	講師・所属	芝山 江美子 寿会 吉沢病院
参加者	7名（講師含む）		

活動内容概要：

1. 講義内容：

「コロナ禍を通して国際看護の動向と今後の課題に向けて」

新型コロナウイルス感染症の国際的な動向についての報告、世界のワクチン接種の進捗状況、インドネシアでのコロナ禍での看護教育について、また、国内で仕事を失い行き場を失った生活に困窮したベトナム人が、埼玉県の大恩寺に駆け込み共同生活をしていること、そのベトナム人への支援について講演された。国内在住の外国人への生活や医療面への支援の必要性について述べられた。

2. 意見交換

Q:国内に住む外国人を対象に研究する場合の効果的な手法について。

A:まずはそのコミュニティに足を運び状況を把握する。そして、キーとなる人々と関係を構築し、そのキーとなる人を中心として深めていくのが効果的ではないか。

A：国や文化の違いによって介入のアプローチ方法が異なるため、その違いが研究テーマにつながるのではないか。

Q：文化や言葉が異なる人々へ、衛生に関する知識や生活習慣を指導するために重要なことは何か。

A：言葉が繋がらなければ、絵をたくさん資料に入れて絵を見せながら説明する。また、外国人が集まるコミュニティを探し、キーとなる人と共に活動することが重要。

【在日外国人間のクラスター発生について】

国内で外国人が狭い家で共同生活をしていることや、マスク装着や手洗いなどの習慣が身につけていないことなどが原因でクラスターの原因となっている。自動車学校に通っている外国人によって学校内で広まったケースもある。生活指導が必要であるが、言語や文化の違いから理解してもらうことが難しいケースもある。

【国内に住む外国人の支援について】

東京都外国人新型コロナ生活相談センター（TOCOS）について紹介があった。外国人への生活相談センターを設置しているが、思っているよりも利用されていないとのこと。今後、発信方法が課題となっている。

3. 参加者の声

実践からの話を聴くことができ、多くの学びとなった。

オンライン開催のため、自分が興味のある分科会に参加できて良かった。

4. 今後の課題

全国から参加者を募ったが、参加者が講師含め8名と少なかった。今後、より多くの方に参加いただけるような工夫（開催時期・場所の検討を含め）が必要である。